

NAGASAKI 11th DELEGATION



ナガサキ・ユース代表団第11期生報告書

つながる、広がる、平和の輪



7 Q&As ABOUT US

ナガサキ・ユース代表団 に関する7つの基本

Q1.

ナガサキ・ユース代表団って何？

A. 「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC) (右ページ囲み参照) が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から77年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ってのプログラムです。

Q3.

費用は誰が負担するの？

A. 活動にかかる費用は、勉強会の開催や報告会の開催、報告書の作成等基本的に核兵器廃絶長崎連絡協議会が負担します。また、活動内容に海外での活動が含まれる場合は、渡航費および滞在費として一人当たり最大で30万円の補助金が支給されます。海外への渡航に際し30万円を超える部分は個人負担となります。
(金額については、社会情勢により変わる場合があります。)

Q2.

誰が応募できるの？

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・大学院生、および同程度の年齢の若者です(18~25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間(任命時から翌年8月31日まで)が終了した後も何らかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るための勉強会や企画、準備のためのミーティングに原則すべて参加可能で、他のメンバーと協力してプログラムに積極的に参加する姿勢が求められます。

Q4.

誰がメンバーを選ぶの？

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけではなく、他大学の教員・英語ネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

Q5.

核問題を専門的に勉強して
いなくても大丈夫？

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の教員に加え元外交官や国連の軍縮担当者など学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。10期生の場合は、任期中に約30回の様々な勉強会と集中講義を受講しました。

Q6.

具体的な行動内容は？

A. 大原則は『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。9期生はコロナウイルスの拡大による渡航制限やニューヨークでの核不拡散条約(NPT)再検討会議の延期により、当初の活動計画を大幅に変更することになりました。結果として主にインターネットを使っての様々な活動を展開しました。核軍縮と平和に関する国際的なセミナーやシンポジウム、ウェブ会議への参加、オンラインでの国際プレゼンテーションの主催、そして核軍縮の分野で活動している様々な人々との交流動画の配信などです。そうした活動はまたSNSを使って発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルな活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

Q7.

任期後の予定は？

A. 8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で平和の問題に関わっていくことが期待されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を依頼されることは珍しくありません、また、核兵器廃絶長崎連絡協議会やRECNAが主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

『核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)』って何？

「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築することが検討され、2012年10月4日に核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)を設立いたしました。また、一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しております。



被ばく地「長崎」で学び、交流すること

有吉 葉奈子

(長崎大学薬学部2年)

私たちはこれまで、被爆地としての長崎、米軍基地がある長崎、など様々な角度から長崎について学び、長崎市内をガイドしていただき、米軍や自衛隊の基地見学なども行いました。原爆については学習しきったつもりでしたが、改めて学んでみると、「世界に目を向け、長崎の歴史をこれからの未来に繋げたい」と強く思うようになり、自分の平和活動のありかたを見直すことができました。佐世保研修では、世界の複雑な現実を突きつけられた気がしました。同じ被爆地長崎であり、被爆国日本でありながら、人の命を奪うものを大事そうに保持し、それを増やそうとしていること、とても悔しく思います。しかし、そこも目を向けなければいけない現実だと思っています。

そんな長崎には、多くの人が訪れます。私たちも、他県や他国のたくさんの方々と交流させていただきました。平和と公共性センター長イ・キホ先生、麗澤大学の学生の皆さん、ICUの学生の皆さん。長崎は外からどう見られているのかわかることができました。

ここ長崎で活動するからこそ出会える人や感じることができることが数多くあると思います。私自身も、人との繋がりや輪が広がり、長崎の人々の心の温かさと想いの強さに励まされてきました。これからもくじけることがあるかと思いますが、振り向けば背中を押してくれる長崎があります。ナガサキ・ユース代表団の活動を通して、長崎でこれからも学び、発信し続けていこう、そう思うことができました。



広島研修で感じたこと

山元 さくら

(長崎大学多文化社会学部2年)

今回の広島研修では、過去とは違う視点で「広島」について考えることができました。

高校時代に一度、観光目的で原爆ドームや平和資料館を尋ねたことはありましたが、その際には、表面的な部分しか学ぶ事が出来ませんでした。「広島日本人被爆者が可哀そう」という感想を抱いた事は記憶にありますが、今回はそれ以上の事を学び取る事が出来たのではないかと考えています。

原爆ドームや平和資料館では、「可哀そう」という感情以上に、様々な形で平和活動に携わる人々との交流を通じて、多くの側面から戦争や平和について考えることができました。

また、広島における外国人被爆者の存在や広島(呉)の軍事的役割等を知ることで、見えない部分の広島についても学ぶ経験ができました。加えて、広島から平和を発信する若者について学んだりもできました。





出前講座とイベント

梶 立人

(長崎大学多文化社会学部3年)

出前講座は新型コロナウイルスが5類に引き下げられたこともあり、今年度はすべて対面で実施することができました。長崎市立桜馬場中学校、長崎市立岩屋中学校、長崎県立桜が丘特別支援学校、諫早市立諫早中学校、三重県鈴鹿市からの依頼要請に伴いメンバーを派遣しました。学校では核兵器の授業はもちろんのこと「私たちに何ができるのか」を生徒と一緒に考えました。SNS発信、私たちの授業を家族、友人に広めるといった方法や、まずは自分が勉強するといった意見がみられました。私たちも研修で得た知識をアウトプットできる良い機会となり、さらには伝え方を学ぶ機会でもありました。私たちは講座を作成する上で少しでも興味を持ってもらうためにより一層勉強しました。

私たちは他の団体が主催する多くの平和イベントに参加してきました。核兵器廃絶長崎連絡協議会が主催する市民講座への登壇と拝聴、長崎県庁で開催されたマーシャル諸島の若者と長崎の高校生大学生対話セッション、キッズゲルニカ、灯籠流しなど多岐に渡ります。11期生の任期が終わった今もイベントに参加しています。



核問題は思っていたより大きく複雑な問題である（G7 サミットと会議傍聴から得たこと）

安元 和愛

(活水女子大学国際文化学部3年)

今年はG7サミットが被爆地広島で開催されました。このサミットにおける一番の成果は広島ビジョンにおいて「核不拡散」ではなく「核軍縮」を強調したということではないかと考えます。また、私たちはバイデン大統領に向け、長崎訪問への歓迎の言葉と私たちの思いを手紙にして届けました。残念ながらバイデン大統領の長崎訪問案は見送られてしまいましたが、バイデン大統領が私たちの手紙を読み、少しでも心を動かされればいいと思います。

そして私たちは7月31日から8月11日にかけて行われたNPT再検討会議準備委員会を傍聴してきました。会議を傍聴していると、各国のスピーチの中でヒロシマ・ナガサキという単語を度々耳にしました。しかし今回の会議ではそれよりも福島の水汚染やザボリージャ原発について多く触れられていたように感じました。NPTの三本柱の一つである原子力の平和利用が本当に「平和」利用と言っているのか疑問に思いました。また、ロシアのウクライナ侵攻については多くの国が批判していました。各国が核廃絶に向けて少しずつながらも前進しようと努力している中、ロシアのウクライナ侵攻、そして核兵器の使用を示唆したことを許すことはできません。悲しみだけが残る戦争が1日も早く終わることを祈りながら各国のスピーチを聞いていました。そのほかにもシリアやイランなどの中東地域について、北朝鮮の核保有・核実験等についても触れられており、核問題というのは私が思っていたよりも大きく、複雑な問題であると感じました。





世界の若者の平和への思いに学ぶ

平林 千奈満

(長崎大学大学院教育学研究科1年)

8月1日に「平和首長会議ユースフォーラム」に参加させていただきました。ナガサキ・ユース代表団からは山元さんと私が登壇させていただきました。私たちの他に、広島の高校生やウィーンの高校生を始めとする世界各国の若者が合わせて8組発表を行いました。私たちからは、ナガサキ・ユース代表団について、任命されてからの日本での取り組み、ウィーンでのサイドイベント、そして私たちの平和への考えを発表しました。平和への考えとして、「長崎を最後の戦争被ばく地にし続けなければならない」こと、『平和』に対する考え方に違いはあれ、戦争のない世界を目指している点は共通していることから、様々な思いを尊重し、耳を傾けることで、共通点を見出し、『平和』な世界を実現するための方法を探っていく」ことを伝えました。各団体から様々な話がありましたが、いずれも核兵器廃絶を目指すことで一致していることを確認することができました。また、フォーラムの最後には中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表から「若い方の真剣な議論は、国連としてもありがたい」というメッセージをいただきました。ユースフォーラムを通して、同年代の若者の活動に刺激を受けるとともに、私たち若者がそれぞれの場所で発信し、そして互いに連携を図ることで活動を高めていくことが大切だと実感し、今後も「長崎を最後の戦争被ばく地」にするために活動していきたいと決意を新たにしました。



書道を通して平和への思いを共有する

末廣 万葉

(長崎大学多文化社会学部2年)

ウィーン渡航中の8月3日のランチタイムにconference room M4にて「Waiting peace -uniting people with Japanese Calligraphy-」というタイトルのサイドイベントを行いました。平和への思いを書道で表現するワークショップ形式のイベントです。

私たち11期はこれまで「長崎を最後の戦争被爆地に」という想いのもと「人と人とのつながり」をテーマに活動してきました。活動を通して、「平和」に関する考えは多様で混在しているのだと学び、人々の考える平和がどんなものなのか知りたい、共通点を見つけ、「平和な世界」をより具体的なものにし、強固な繋がりを持ちたいと思うようになりました。私たちは繋がりを持つための手段として、日本の伝統である書道を選択しました。書道は、答えがなく、筆跡に人となりが見れる芸術です。同じように「平和」も答えがなく、それぞれの経験や理想によって形づけられるもので、どちらも「答えがない」という部分が共通しています。このようにして、書道を用いたイベントを実施することにしました。渡航前の6月に同じイベントを長崎大学で行い、学生たちと「平和への想い」を共有しました。大学だけでなく、被爆者団体や平和活動を行っている人にも想いを書いていただき、それらを部屋に飾ったり、ショートムービーにして流したりして、長崎の平和への思いをウィーンの人々に届けました。イベントには大石知事、鈴木市長、今西公使にもお越しいただきました。

サイドイベントを通して、平和とはただ暴力のない状態ではなく、心が平安な状態、つまり、日常の中にある小さな幸せを見つけることができるくらい穏やかな状態のことなのかなと思いました。





ウィーンで出会った様々な方とお話を通して

今岡 明日美

(長崎大学環境科学部2年)

11期は、派遣先のウィーンで、被爆者の方、各国の大使や外交官、包括的核実験禁止条約機関準備委員会(CTBTO)および国際原子力機関(IAEA)の関係者とお会いしました。

被爆者の方のお話では、肉体的・精神的に今なお原爆により苦しんでいる方がいることを伺い、原爆の傷跡は長く続くことを改めて学びました。CTBTOやIAEAとの対談では、各国の核兵器製造・保有の動きをどのように監視しているか、核物質をどのように検知しているか等を伺い、国際的な機関がどのように核問題においての役割や立ち位置を知りました。原発に関する国際機関の考えなどまだ疑問に思うこともありますが、核不拡散や核廃絶が進むにはこのような機関が不可欠だと感じました。

各国の大使との対談では、特に核依存国は、安全保障のために今は核兵器が必要であると考えていることを学びました。核兵器が無くなるのはまだまだ時間がかかるように見えます。しかし、私たちには、「被爆者の方に核廃絶のその瞬間を目で見てほしい。将来世代にまでこの問題を抱えてほしくない。」という想いがあります。面会時間も限られていたため、伝えられなかったことも多くあり、悔しい思いもたくさんしました。今を生きていく中で、被爆者の声、市民の声が本当に世界のリーダーや社会の中心にいる大人に届いているのかどうか疑問に思うことが多々あります。

しかし、今回、様々な方との対談を通して、「核廃絶」という願いをはじめ私たち若者の声が少しでも世界を動かす大人に伝わったことを願っています！



11 期の活動を振り返って

河合 公明

(RECNA副センター長)

「長崎の歴史を知り、伝えていくだけでなく、そこから何を考えなければいけないのか、自分がこれから生きていく世界をどのような世界にしたいのか、今のままでいいのか、自分には何ができるのか、見つめなおすことができました」。これは、ナガサキ・ユース代表団第11期生の活動を締めくくる、2023年8月28日の活動報告会におけるメンバーの報告の一節です。この一節に、「自らが知りたい」という動機に導かれた活動してきた第11期生が、2022年12月の任命からの9ヶ月間、何を学び、何を考え、何に悩み、どう行動してきたのか、集約されています。またこの一節に込められたメッセージは、5月から第11期生を担当させていただいた私にとって、「これからの時代を生きるメンバーからの問いに、先行世代の1人としてどう向き合うか」という大きな課題を与えるものでした。世代間で異なる視点も大切にしつつ、平和な世界を作り上げていくために、共に学び、考え、悩み、行動するところに、ナガサキ・ユース代表団の素晴らしさがあると思います。その素晴らしい伝統に新たな1ページを加えてくれた第11期生の皆さんでした。



OG&OB VOICE



(2023.10 月現在)

三宅 凜 8期生

(コンサルティング関係)



ナガサキ・ユース代表団を経験することで、きっと予想していなかった力が付くと思います。今振り返って私が感じる、経験から得たことを2つお伝えします。

1点目に、地球環境破壊や核兵器製造を助長しているものに無意識に加担してしまうことがあるということを知った経験から、自分の選択が何に繋がるのかという点を一度立ち止まって考える癖がついたことです。選択の先に何か被害を被る人がいないか、広い規模で考えるようになりました。この考え方は仕事でも生きています。

2点目に、世界の動きに注目するようになったことです。忙しい日常を過ごしているという忘れがちですが、一步立ち止まって平和について考えることで、世界で起きているニュースに対しても敏感になりました。毎朝、新聞やニュースは必ずチェックしています。

“例え大きく世界を変える力が無いとしても、それは考えることを放棄する理由にはならない”という信念が芽生えたのもユースのおかげです。

もし迷われているのなら、ぜひ皆さんもチャレンジしてみてください！歴代のOB&OGと一緒に集まれる日を楽しみにしています！

藤田 裕佳 9期生

(一橋大学大学院生)



私たちが活動した時期はコロナウイルス感染拡大が深刻であったため、国際会議やフィールドワークだけでなく、日頃行うミーティングでさえも対面でできない状況が続いていました。それでも、被爆地ナガサキの若者としてどんなメッセージを発信していくのか、コロナ感染対策を行いながらどのような活動を展開していきたいのか、9期生だからこそ残せるものは何なのか、メンバー内で何度も話し合いを重ねました。先輩方や後輩たちと比べれば、海外や日本国内のさまざまな場所に派遣されたり対面でのイベントに参加したりした経験は確かに少ないけれど、同じ熱量で決して諦めず活動を全うできたと自信を持って言えます。メンバーと切磋琢磨しあいながら学びを深め、いろいろなことに挑戦できた1年間は、私の宝物であり、糧であり、青春です。今、私はナガサキ・ユース代表団で学んだことをさらに深掘りするために、大学院で核兵器をめぐる安全保障政策について勉強しています。そんな決断の後押しをしてくれたナガサキ・ユース代表団に感謝すると同時に、たくさんの人たちにこのような素晴らしい貴重な経験を体験してほしいと思っています。

猪原 彩美 10期生

(長崎大学多文化社会学部3年)



私はこの活動を通じて、被ばく者の方々をはじめ世界各国で平和活動に励む人と沢山の出会いがあり、彼らとの対話から新たな視点や考え方を得ることができました。これは、この活動の魅力の一つでもあります。核兵器問題は、当然一筋縄ではいきません。任期中にはウクライナ軍事侵攻が始まり、自身の無力さを痛感したのを覚えています。しかし、これまで出会った仲間と悩みや葛藤を共有し、共に尽力し続けようという原動力にもなりました。月日が経つにつれ報道も減少し、戦争や核問題がどこか遠い話だと思いませんか？核兵器が世界に1つでも存在する以上、計画的にも偶発的にも使われかねず、人々はそのリスクと共存しています。ナガサキ・ユース代表団は、RECNAの先生方や協議会の方々のサポート等、最高の環境下でこの問題について自ら主体的に行動できる絶好のチャンスです。是非、ユースに挑戦してみてください。

野尻 稀海 10期生

(長崎大学多文化社会学部3年)



大学進学を機に長崎に来て、何か平和に関わる活動をしてみたいと思っていた時にたまたま見つけたのが、ナガサキ・ユース代表団でした。ギリギリまで悩みましたが、結果的に応募してよかったと思っています。

任期中の2月、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まり、今ある日常は当たり前なものではないのだと改めて実感しました。一見平和に思えても、いま世界には1万発以上の核兵器が存在しています。本当の「平和」とは何なのか、任期を終えた今でも自分の中では漠然としたままです。ですが、考え続けることが大切なのだと、活動を通して多くのことから学びました。

ユース代表団としての1年は大変なことも多かったですが、様々な知識や経験を得ることができました。一緒に活動した6人のメンバーとはぶつかることもありましたが、それ以上に楽しい思い出がたくさんできました。この経験はきっと一生ものになります。少しでも関心があるなら、応募してみませんか？

■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14

(長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA内))

TEL:095-819-2252 / FAX 095-819-2165

<https://www.pcu-nc.jp>

**核兵器廃絶
長崎連絡協議会**
PCU-Nagasaki Council

「ナガサキ・ユース代表団」公式Facebookページ
<https://www.facebook.com/nagasakiyouth>

facebook

ナガサキ・ユース代表団

